
喪われゆく世界

えこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喪われゆく世界

【Nコード】

N3356S

【作者名】

えこ

【あらすじ】

ある村の、丘の上に住む魔法使いと、その友人と、居候と。その世界、ヘクトラシル〜についてのちょっとした会話。

01. 丘の上の魔法使い

その村は、山深いところにあつた。

村から一番近い丘をこえるとすぐそこには小さな泉があつたが、村人はあまりそこへは近づかなかつた。子どもが遊ぶにはもつとほかの場所があつたし、村人が憩う場所もほかに幾らでもあつたからだ。それにその泉は村人から少しばかり神聖視されていた。もしかしたら、それが一番の理由かもしれない。

だから、と云うわけではないが、その泉を見おろせる丘の上に館をかまえる魔法使いは変人だと村人は思っていた。

めんと向かつて「お前は変なヤツだなあ」と云う村人もいるが、性格があまりよろしくないその魔法使いは一瞥の冷笑いちべつを向けるだけだ。これでこの魔法使いと村人の中が陰悪にならないのだから、いたっておおらかな人たちだと云える。

丘の上に建つその館はどっしりとした石造りだったが、少しばかり奇妙な形をしていた。円屋根の丸い棟が大小いくつもつらなっている。正面から見えるだけでも五つの棟がある。まったくもって意匠を凝らしたかどうか意見の分かれる造りだ。

その奇妙な形をした魔法使いの館に近づく姿があつた。赤銅色しゃくどういろの髪に薄い茶色の眸をしたセナートへ人間セナートの青年だ。

二十歳をすぎた頃であろうその青年は館の扉を叩きもせず、勝手知つたる様子で中へ入っていった。

「おい、シイロン。生きてるかー？」

生きてるだろうな、と思いながら青年、ラインは館の主がいるであろう場所へと向かつた。

入ってすぐの階段を上がり、空中回廊へつづく扉をくぐって、その先に見える、この館で最も大きな棟へと迷いなく進んでいく。そうしてあけた扉の向こうは、視界一面をうめつくす本の山だった。

「あいかわらず、すげえ本の山……」

半ば呆れ、半ば感心し、ラインはどこに居るともわからない館の主を探しにその山の中へとわけいった。

「人がとおれる道があるだけまだマシか」

誰に云うでもなく、呟いた。それから少しだけ息をすって。

「シイロン。いたら返事しろ」

探すのが面倒だったのだ。ものぐさ者か、と云うとそうでもないのだが。このどこかの大図書館の書庫のようなありさまの書齋なのだ。しかたないかもしれない。この棟は地下、一階、二階の大きく三つにわかれており、そのすべてが本でうまっている。

最近はずっと二階にいたからここかと思ったが、今日は違うのだろうか。

そうラインが思いはじめた頃、とおくから館の主、シイロンの声がかえってきた。どうやら一階にいるらしい。

はしごのような階段を伝って一階におりると、本のあいだから、ひらひらとふられる手が見えた。

「こっちこっち。ここだ」

何ともやる気のない、だるそうな声だ。

さては徹夜でもしたか、行きづまっているのか。

そんなことを考えながらラインはシイロンの方へ行った。

「よ」

「よ。珍しいな、ライン。何のようだ？」

本から少し目を上げ、深く椅子にもたれたまま来訪者へと目をやる。鳶色^{とびいろ}の髪にやさしげな藤色の眸。それを灯すのは魔法使いらしい叡智の光だ。

「ようと云うか……」

眩きながらその辺りのものをどけ、適当に腰をおろす。手慣れたものだ。

「また、見合い話でもきたのかよ？」

なかなか切りださないラインの先回りをしてシイロンが云う。だがその視線はもはや手にした本に向いていた。

「——なんでわかるんだ？」

「何年のつき合いだよ」

「……それもそうか」

納得したらしい。

それからラインは我が家のようにくつろぎはじめる。シイロンもそんなラインを気にする風もなく、本に没頭した。ぶあつい、^かびの生えたような古い本だ。それを見たラインは、ふと興味がわいて訊ねてみた。

「そんな本、あったか？」

「うん？　——ああ、これか。フィリスの実家からもってきたヤツだよ」

「どうりで。……そういうやフィリスちゃんは？　さっきから見ないけど」

この奇妙な館にはシイロンのほかに、もう一人すんでいる。フィリスという、今ではほとんど見なくなった^{ネヤーム}の娘だ。いつもなら姿を見せて話の一つもするというのが、今日はさきほどからまったく姿を見ない。

「最近、根をつめてたからな。むりやり外に行かせた」

そう云うお前はどうかんだ、とラインは思ったが口にはしなかった。それほど疲れているようには見えないからだ。実際シイロンにとってはあまり負担になっていないのだろう。ある意味、化け物である。

シイロンの館から少し東へ行くと、ひらけた草原の丘がある。そこからは村が一望でき、その上、村を囲む山の向こう側が少し見えた。

フィリスはそこからの眺めが好きだった。

「うーん。気持ちいい」

体を思いきりのぼし、ごろりと大の字に寝ころがる。身も心も軽やかにしてくれるような風は、彼女の銀灰色の髪を揺らして天に還った。

02. かつて栄えたもの

「その、フィリスちゃんの実家からもってきたって云う本で、どんな本なんだ？」

シイロンが入れた紅茶をのみながら、ラインは彼が手にした本をさした。ずいぶんと凝った装丁の、古い言葉で記された本。

「——フィリスの実家、ね」

「？ 何だよ、その反応」

口の端だけを上げて笑みを浮かべたシイロンに、ラインは怪訝な顔をした。

「フィリスがいなくなってからずっと手つかずだった、ってのにも驚かされたが、『これ』にはもっと驚かされたね」

本をあげて視線をそちらへ向かせる。

「どういうことだ？」

「……フィリスって、もとは〈ギルド〉時代のヤツだろ？ よく個人でこれだけ所有してたもんだよ。いや、それ以前によく捕まらなかったもんだ」

目を細めて肩をすくめる。

フィリスは時間に流され、シイロンたちの前に現れた娘だった。時を流される、というのはこの世界に於いて時折起こる現象である。フィリスのように生涯で一度しかあり得ないだろう者もいれば、時をさまよい、何度も経験する者もいる。その代名詞とも云える人物が高名な魔術師、〈青の魔術師〉だろう。

そしてフィリスが本来いた時代、それは一般的に〈ギルド〉時代と呼ばれる頃だ。現在、シイロンたちがいる時代よりもずっと昔だ。始まりははっきりしないが、終わりを告げたのは今から約千年前。フィリスがいたのは全盛期を少し過ぎた、今から二千年ほど前である。フィリスがいた頃はまだ〈ギルド〉は健在だったはずだ。

「お前さ、わかるように説明する気ないだろ？」

半眼になって睨めつけるとシイロンは、悪い悪い、と云う、あまり謝罪の気持ちさがこもっていない返事をした。

「わかるように説明するから睨むなって」

どうぞ、とラインは無言で先をうながす。

「〈ギルド〉が〈飛天〉^{ひてん}の遺跡や彼らについての文献を独占してたのは知ってるよな？」

飛天。

さまざまな名で謳われる、美しき翼の人々。天の佳人、天下随一の魔術師、空の一族。その美称を挙げればきりが無い。唯一、空を行く〈天空の島〉^{エンシリアム}の地を踏むことが許された人々。彼らは透けるような美しい翼をもち、古代文明と云われる高度な文化を築き上げた。そして彼らは〈幻の民〉とも称される。

中世〈ギルド〉時代、〈ギルド〉は数少ない飛天の地上遺跡を独占していた。何人が踏みいることも拒否した〈天空の島〉^{エンシリアム}にしか存在しないと思われていた飛天の地上遺跡。それはとても貴重なものだ。それを〈ギルド〉は我がものにし、人々の目から隠した。できることなら、飛天にまつわるすべてのものを〈ギルド〉は手中にしたかっただろう。

だがそんなことは不可能だ。飛天の姿は叙事詩の中で謳われ、昔語りとして親から子へ、子から孫へと伝わり、人々の羨望を集めた。

謎かけをするようなシイロンの言葉えらびに、ラインはぴんときた。

「もしかして、飛天の？」

「ご名答」

フィリスの家にあったのは、飛天について書かれた本だった。蔵書の量としてはシイロンの書斎におく及ばないが、だからと云って決して少ないわけではない。シイロンを驚かせたのはそれらの本、

すべてが飛天について書かれているということだった。その上、幻とまで云われている〈ギルド〉時代屈指の魔術師、月の賢者の、それも飛天についてまとめられた著書まであったのだ。

「……それってさ、ふつうに宝の山って云わないか？」

「云うな」

おそらくそのフィリスの実家からもってきたという本を売れば、財産の一つや二つや三つや四つ、築くのは朝飯前だろう。

「…………フィリスちゃんて一体どこのオジヨウサマなわけ？」

「さあな」

云って肩をすくめる。本人があまり話したがらないので、シイロんたちも無理に訊こうとはしなかった。それに別段、知る必要もないからだ。

「ま、知りたかったら本人に訊くんだな」

「——遠慮しとくよ」

こたえて、ぬるくなった紅茶を口に含ませた。

「それにしても、それだけ飛天に関する文献があるなら、いつそ飛天の研究でもやったらどうだ？」

十分できそうじゃないか、と少し笑みを浮かべてラインは云った。だがシイロンは渋い顔をするだけである。

「何だよ、何か問題でもあるのか？」

「問題？ アリアリ。大アリだ」

「変な云い方」

「ほっとけ」

シイロンが渋い顔になるのには、それなりの理由があった。

その一つが文献など、資料の少なさだ。飛天は本来、地上ではなく〈天空の島^{エンシリアム}〉で生活していた。その為、彼らの記したものの大部分は手つかずのまま、その島に残っているはずだ。そして〈天空の島^{エンシリアム}〉へは行くことが不可能だと云っている。地上にあるものと云えば、大昔、飛天がまだ健在だった頃、彼らと言葉を交わしたという人々の記録か、彼らにまつわる昔話、そして〈ギルド〉に在籍して

彼らの残した地上遺跡を調査した人々の報告書などが主だ。いずれもその数は少ない。その上、中には信憑性の薄いものも多数含まれるのだから手に負えない。それでもこの点については、フィリスの実家にあったものののおかげでかなり解消されるだろう。

しかし。

結局、何をどう論じようが、それは机上の空論でしかないのだ。立証し、裏づけるものは何もない。

「非常に、興味をかきたてられる対象ではあるんだがな」

空をわたる雲が、たかい。冷たい匂いの風が、心地よい。それでも陽射しはつよく、心がすんと、と落ちつく。

こんな日は心が思うまま、どこへなりとも行かせてやるのがいい。風の涼やかな気配を感じ、フィリスはまた大きく息をすってやった。

03. 翼の人々

ラインは心の底から残念がるシイロンに、苦笑するような溜息をついて視線をやる。それからふと思いだしたように言葉を紡いだ。

「そういや、けっきょく飛天でどうして滅んだんだ？　ありとあらゆる技術、魔術に秀でてたんだろ。疫病とか争いとか、そんな陳腐な理由で滅んだとは思えないぞ？　云い伝でははつきりと『神の怒りにふれた』とあるが、信じるには無理がある。まあ、ほかにも色々云われてるけどさ」

もったもな、疑問だった。

美しい姿をもつ飛天。彼らの築いた社会は『理想的』だと云われる。どんな風に理想的だったのかは、わからない。ただ、『理想的』であつたと記される。それは彼らの暮らしぶりが平和で豊かで穏やかで、おおよそ、貧困や争いとは無縁だったことに由来するのだろう。

だが、飛天はある日突然に滅んだ。何の前兆もなく。天変地異が起こつたのでもない。ただ、その日、かつて存在した多くの^ネへ古^{ヤム}よりの人々^{ヤム}が『飛天はもういない』と知つたのだ。

それつきりである。

なぜ滅んだのか、どんな最期を迎えたのか、それを知る者はいない。

何もかもが曖昧で、それ故に飛天は時として『幻の民』と呼ばれることもある。

後世の人々のあいだでは憶測だけが飛びかい、けっきょく彼らの王が神の怒りにふれ、滅ぼされてしまったのだという結論で落ちついた。王が居たのかどうかさえもわからず、ましてや怒り狂った神についてもわからない。どんな禁忌を犯したのかなど、考えるだけむだだ。人々がだした結論は眉唾ものでしかない。

しかし、そう思わせる何かが、彼らの最期にはある。

それだけ彼らは『忽然と消えてしまった』のだから。

シイロンは静かに窓の外へ目をやった。

「——かつて、俺たちは時の導きによって飛天をかいま見ることができた。だけど『飛天の滅び』そのものを見たわけじゃない」

そう、シイロンたちは飛天の姿を、社会を、少しでも知ら知っている。ほんの気まぐれのようなものだったのだろう。その気まぐれのおかげで、死にそうなほどの苦勞をしながら世界中をかけずり回されたのだが。

それはまた別の話である。

「俺たちが目にした飛天の姿に滅びの影は——、なかった」

だが飛天は滅んだ。

それが事実であり、それだけが真実なのだ。

ごろりと寝ころがっていたフィリスは、ふと、空気がかわつたことに気づいた。何だろう、と身をおこした先には村が広がる。そこに異変はない。だが彼女の胸はそわそわと、何かを告げる。立ちあがり、周りをくると見わたした。

そして目に留まったのは、木々の向こうからわずかに光をかえす泉の水面だった。シイロンの館からよく見える、不思議な泉。

首をかしげてその泉をとおくから眺める。

変化は、突然始まった。

水面の光がましかと思うと、その上にゆつくりと蜃気楼のように大きな影が映しだされる。ほかでもない、エンシリアム〈天空の島〉の姿だった。

「うわあ……」

村人が泉を神聖視する理由だった。

この近くに^{エンシリアム}〈天空の島〉はない。

だが、どこに浮かぶともわからない^{エンシリアム}〈天空の島〉の姿を、泉は蜃気楼のように見せてくれるのだ。

風が、また一つ吹いた。

04. 喪われゆく世界

静寂がゆるやかに二人をつつんだ。口にするべき言葉が見あたらなかったのかもしれない。

「飛天は滅んだ。――だが実のところ、滅んだのは飛天だけじゃない」

空になったカップをそばの小さなテーブルにおく。その姿をラインは少し眉をひそめて見やった。

「飛天だけじゃないって？」

その視線の先で、シイロンはゆっくりと扉へむかう。そしてそのとつてに手をかけた。

「そのまんまだよ。飛天だけじゃない。〈古よりの人々〉^{ネヤーム}もさ」

云いながら扉を内へひく。

扉がひらいたそこには、フィリスがいた。

「おかえり、フィリス」

シイロンがにっこりと微笑みかける。扉をノックしようとした、まさにその瞬間の姿で彼女はかたまっていた。無理もない。

ノックのためにかかげた手をそのままに、フィリスはシイロンを見上げた。

「ただいま。よくわかったわね」

少し乾き、呆れた口調になってしまふのは否めない。いつもそうなのだ。

「〈古よりの人々〉^{ネヤーム}云々ってきこえたけど、何の話？」

ラインと同じく慣れた様子でその辺のものをどけ、腰を下ろしたフィリスはシイロンから紅茶をうけとる。

「飛天だけじゃなく〈古よりの人々〉^{ネヤーム}も滅んだ、っていう話」

フィリスが怪訝な顔をする。その横ではラインも同じような顔をしていた。

「どういうこと？」

訊ねるフィリスに、シイロンはかるく口元に笑みをうかべる。

「フィリスは〈古ネヤームよりの人々〉だろ？」

もちろん云うまでもなく、と彼女はうなずく。

「だけど姿は俺たちとそうかわらない。少し耳の形が違うだけだ」
確かにそうだ。耳が、ほんの少しとがった形をしているだけで、
あとは同じだ。すらりとのびる手足。動物たちと違って体毛の薄い
体。髪や目や肌の色に個体差がでるくらいだ。

「それがどうかしたの？」

それにシイロンはにやりと、ラインが云うところの意地の悪い笑
みを浮かべ、云う。

「フィリスは〈古ネヤームよりの人々〉だ。だけどそれ以上は答えられない
だろ？ 自分は何の一族か、云えるか？ 云えないだろ？」

「それはっ……」

フィリスは言葉をつまらせた。だがシイロンは平然とつづける。

「つまりは、そういうことさ。〈古ネヤームよりの人々〉たちは一族でわか
れて暮らしていた。もちろん、一族にはそれぞれ名前があった。自
分のアイデンティティのようなものだ。だけど、フィリスはそれが
云えない。この意味するところは？」

云われて、はっと気づいたようにラインがシイロンを見た。

「——混血か！」

「正解」

それでもまだ、姿は見かけた。

人間とはかけ離れた姿をした、〈古ネヤームよりの人々〉の姿を。

フィリスが祖母の影をおっていた頃は。

けれどそれは今から二千年ほど前の話である。

シイロンの話によると、〈ギルド〉時代から〈古ネヤームよりの人々〉の
混血は始まり、その全盛期から末期にかけて急速に進んだという。
もともと、混血に対する嫌悪感や抵抗がなかったのだらうと。それ

はフィリスも大いに実感するところだ。なんせ、自分の血脈がそんなのだから。

「〈古^{ネヤーム}よりの人々〉は飛天のように突然きえてしまうような、直接的な方法でいなくなっただんじやない。混血という間接的な方法だ。混血を繰り返すうちに、〈古^{ネヤーム}よりの人々〉は人間とほとんど違いない姿になった。飛天なんかは、混血児には翼がなかったらしい。混血によって、人の姿はよりシンプルな方へと変化していったんだ。人の、一番シンプルな姿と云われているのが、人間さ」

今では人間の姿しか見ないが、〈古^{ネヤーム}よりの人々〉を祖先にもつ者がほとんどで、もなたい者の方が珍しいだろう、とシイロンはつけたした。

「つまり俺やお前にも少なからず〈古^{ネヤーム}よりの人々〉の血がはいってる、と？」

「はいっていない方がありえないとも云える」

思わずラインは目を丸くする。今までそんなことは考えたこともなかったのだ。

「〈古^{ネヤーム}よりの人々〉は、いわば人間と同化してしまったのさ。そして同時に人間も変質してしまった。——これも、一種の滅びだろう？」

それは、どこか嘲笑うようでもあった。

そして沈黙が落ちる。

砂が崩れ、手の中から落ちてしまうような感覚だけが胸に残った。こうしている間にも、どこかで何かがきえていってしまうような焦燥感。

「だんだんと、世界は喪われていっているのね……」

ぼつりとフィリスが呟いた。

「ああ、そうかもしれない」

溜息とともに吐かれたシイロンの声は、少し渴いていた。ぼんやりと、ラインは視線を窓の外へやる。その先には揺れる幻の〈天^{エンシ}空^{リアム}の島〉と流れゆく雲があった。

「どうなるんだろうな」

「さあ？　なるようにしかならないだろ」

そう。けっきょく、なるようにしかならないのだろう。彼ら三人には手のとどかない、干渉できないことなのだ。

窓のそとの空は青い。

なるようにしかならなくて、それで世界が喪われてしまうその日も、きっと空は青いのだ。雲や^{エンシリアム}〈天空の島〉が、その空から喪われてしまっても。

それでもきつと、空は青いのだ。

世界中をさまざまな天変地異が襲う〈大災害〉が起こるのは、この数年後のことである。

〈喪われゆく世界・完〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3356s/>

喪われゆく世界

2011年4月22日04時25分発行